

&lt;研究論文&gt;

# 人文・社会科学分野の専門分野別習得度と関連する大学教育は何か —日本学術会議の参照基準に着目して—

小山 治<sup>1</sup>

本稿の目的は、全国の4年制大学の学部4年生に対するウェブ調査によって、人文・社会科学分野の専門分野別習得度と関連する大学教育は何かという問いを明らかにすることである。本稿の主な知見は、10個の専門分野ごとにみても、大学教育の中でも授業経験よりも学習経験（特に探究的な学習、授業間を関連づけた理解、授業外での活用）の方が専門分野別習得度と有意な正の関連があったという点である。以上から、本稿の結論は、人文・社会科学分野の専門分野別習得度と関連する大学教育は、授業経験（どのような授業をどれくらい受けたか）ではなく、学習経験（何を考え、どのように学んだか）ということになる。ただし、この具体的な内容については、専門分野間で共通する部分と共通しない部分があり、両者を慎重に見極める必要がある。本稿の知見の含意は、次の2点である。第1に、授業形態に過度に着目した大学教育改革・授業改善への警鐘が必要ではないかという点である。第2に、大学に求められるのは、学生が自らの学習経験を高められるような仕組みづくりではないかという点である。

キーワード：専門分野別習得度、参照基準、学習経験、授業経験

## 1. 問題設定

本稿の目的は、全国の4年制大学の学部4年生に対するウェブ調査によって、人文・社会科学分野の専門分野別習得度と関連する大学教育は何かという問いを明らかにすることである。

文部科学省からの依頼を受けて、2010年7月に日本学術会議（2010）は、「大学教育の分野別質保証のための在り方」についての回答を行った。そこで注目されるのは、「分野別の質保証の核となる課題は、学士課程において、一体学生は何を身に付けることが期待されるのかという問いに対して、専門分野の教育という側面から一定の答えを与えることにある」とされた上で、「分野別の教育課程編成上の参照基準」（以降、参照基準と略記する）についての考え方が提示されたという点である（日本学術会議 2010: ii）。具体的には、①「各学問分野の固有の特性」、②「すべての学生が身に付けるべき基本的な素養」、③「学習方法及び学習成果の評価方法に関する基本的な考え方」を中心として（日本学術会議 2010: ii）、その後、2021年10月末までに33個の専門分野の参照基準が公表された。

本稿でいう専門分野別習得度とは、この参照基準において「すべての学生が身に付けるべき基本的な素養」とされた内容を参考にして作成された自己評価指標を指す（詳細は後述する）。本稿では、参照基準をウェブ調査の質問項目に落とし込み、その達成度を測定するという独自の取り組みを行った。

本稿が専門分野別習得度に着目する根拠は、次の2点である。

第1に、当該習得度は、「すべての学生が身に付けるべき基本的な素養」と公的に明言された重要な学習成果の一つであるからである。日本学術会議の公式ウェブサイトにある「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準について（解説）」という文書によれば、参照基準の目的は「大学教育の質の保証に資すること」とされている。専門分野別習得度を質問項目として変数化することは、日本の大学におけるIR（Institutional Research）の推進とも密接に結びつく試みであり、参照基準の目的を達成するための重要な第一歩となると考えられる。

第2に、にもかかわらず、多くの学生は専門分野で何を身につけたのか明確に語れないと考えられるからである。学生・教員・職員によるFD・SD研修の最終報告会記録である関西大学教育開発支援センター（2021: 192）において、学生が興味深い報告を行っている。そこでは、学生一般は「実社会で大学で培った考える力を活かして」いないため、「学問の中でしか考える力を発揮できずに卒業」し、「大学で学んだことを言えない」と述べられている。こうした現状に対する解決策として提案されているのは、ビジネス・フレームワークのような「思考の型を身につけることに特化した授業」である。ここで重要なのは、選抜性の高い大学の（しかも大学に同調的と推測される）学生でさえ、専門分野で何を身につけたのか十分に言語化

<sup>1</sup> 京都産業大学 全学共通教育センター

できないという現状である。

一方、本稿における大学教育とは、①授業経験と②学習経験を指す。前者は特定の形態・内容の授業を受けた経験を意味し、後者は学生がどのように学んだのかという学習行動を意味する。いずれも、学習時間のような学習の量というよりは、学習の質に関する変数である。具体的な質問項目は後述する。

以上を踏まえて、本稿では、原則として、10個の専門分野ごとに前述した2つの大学教育と専門分野別習得度との関連性を実証的に明らかにする。

本稿の構成は次の通りである。2章では、本稿と関連する先行研究の到達点を整理し、その問題点を検討した上で本稿の学術的な意義を論証する。3章では、全国の4年制大学の学部4年生に対して実施したウェブ調査の概要を説明する。4章では、分析で使用する変数の設定を行う。5章では、本稿の問いに答えるための分析を行う。6章では、本稿の主な知見をまとめて結論を示し、その含意について考察した上で、今後の課題を指摘する。

## 2. 先行研究の検討

本稿と直接的に関連する先行研究は、必ずしも多くはない。なぜなら、複数の専門分野に着目した実証研究を実施する場合、大規模な標本が必要となるからである。ここでは、高等教育論や教育社会学の領域における大規模な実証研究を取り上げる。

まず、先行研究の到達点を整理する。

有本編(2003)は、1999年12月に全国の国立・私立大学21校に対して大規模な学生・教員調査(質問紙調査)を実施した先駆的な実証研究である。学生調査では、回収数6199ケース、回収率42.8%となっている。このデータを分析した村澤(2003)は、人文社会系、理・工・農学系、保健系、教育系、その他といった専門分野ごとに学生の能力・力量と興味・関心の規定要因を重回帰分析によって明らかにしている。それによれば、学生のニーズを志向したカリキュラム編成は、人文社会系、理・工・農学系、教育系、その他といった専門分野において学生の能力・力量と有意な正の関連があること等が明らかにされている。

葛城(2006)は、2004年12月から2005年1月にかけて全国の4年制大学14校(国立大学6校、私立大学8校)34学部の4年生(医学部・歯学部については6年生)に対して実施されたウェブ調査(一部は質問紙調査)のデータを分析している。調査対象学部の在学者数を分母とした回収率は36.6%であり、分析対象者は1960名である(国立大学生が59.2%)。分析の結果、「分析と応用」、「相対的な自己認識」といった「学習経験の質」に相当する変数が「専門の到達度」と

有意な正の関連があること等が明らかにされている。ここでは、専門分野内の詳しい分析は行われていない。

小方(2008)は、東京大学が2007年に127大学288学部の学生に対して実施した「全国大学生調査」の中間集計データ(4万4905名が回答)を分析している。分析対象が1年生と3年生に限定されているため、最終的な分析対象は63大学104学部1万7542名となっている。分析の結果、学生のエンゲージメントである能動的学習と授業外学習時間が、汎用的技能と学問的知識に対して有意な正の関連があること等が明らかにされている。ここでは専門分野は独立変数の一つに位置づけられることに留まっている。

両角(2010)は、小方(2008)と同じ調査のデータを分析している。そこでは、授業の効果に着目した上で、経済学部と工学部の比較、大学間の比較が行われている。分析の結果、2つの学部のいずれにおいても、学生配慮型授業は専門の理論的理解と有意な正の関連があること等が明らかにされている。

金子(2013)は、前述した「全国大学生調査」等を分析した総括的な研究である。分析の結果、①参加型授業は汎用能力の形成に強い効果があること、②学習動機は専門・職業能力の獲得において最大の規定要因であること、③自律的学習時間は、専門・職業能力、汎用能力、一般的な生活意欲に対して正の影響があること等が明らかにされている。ただし、ここでも専門分野は十分に考慮されていない。

溝上(2018)は、京都大学高等教育研究開発推進センターと電通育英会が2007・2010・2013・2016年に大学1・3年生に対して実施した「大学生のキャリア意識調査」のデータを分析している。インターネットモニター調査が採用されており、各年の回収数は2000～2650名程度となっている。そこでは、能力の習得度も質問項目とされているものの、キャリア意識(特に将来に対する見通しとその理解・実行)に重点が置かれている。専門分野別の集計結果は資料として添付されているが、十分な分析は行われていない。本稿との問題意識の違いに過ぎないが、この傾向は、京都大学高等教育研究開発推進センターと河合塾が2013年から全国約400校の高校2年生4万5000人に対して実施した「学校と社会をつなぐ調査」(10年トランジション調査)においても同様である<sup>1)</sup>。

次に、以上の先行研究の問題点を検討する。

先行研究に共通する問題点は、次の3点である。

第1に、日本学術会議の参照基準に依拠した人文・社会科学分野の専門分野別習得度の設計と測定が十分に行われていないという点である。本稿は、この点に最初に取り組む先駆的・試論的な研究である。

第2に、専門分野別の分析が問題関心の周辺に位置づけられているという点である。専門分野は独立変数



の一つに過ぎないか、大雑把なカテゴリーで分析されているに過ぎない。これに対して、本稿では、人文・社会科学分野の中身を細分化して分析する。

第3に、調査対象者が必ずしも学部4年生に限定されていないという点である。学士課程教育の学習成果を測定する場合、4年間の授業をほぼ履修し終えた学部4年生を調査対象者とするのが妥当である。

以上の先行研究の問題点を克服するために、本稿では次章で詳述するウェブ調査のデータを分析する。

### 3. ウェブ調査の概要

本稿の分析で使用するの、全国の4年制大学の人文・社会科学分野の学部4年生に対するウェブ調査のデータである。

本調査は、科学研究費補助金の助成を受けた共同研究の一環として、企画・実施された。本調査は、学部4年生を最初の調査対象者として、同一人物を卒業後3年目まで毎年追跡するというパネル調査として設計された。調査名は、「大学での学びと卒業後の仕事に関する調査」である。

今回分析する第1波調査のデータは、次の2つの段階に分かれて採取された。まず、日本学術会議の後援を得て、日本学術会議第一部会会員・連携会員の勤務先大学の学部の中から調査に対する協力を得られた全国50の人文・社会科学分野の学部を調査対象とした。実査は、各学部事務より学生のメーリングリスト等で調査画面のURLを通知し、回答を依頼するという方法で行われた。調査時期は2019年10月～2020年1月である。有効回収数は、1184ケースとなった。当初の計画よりも有効回収数が少なくなったため、次に、第1波調査対象学部、COC+（地（知）の拠点大学による地方創生推進事業）、ある地域コンソーシアムに含まれる学部に対して調査を依頼し、協力が得られた99学部を追加的に調査対象とした。実査は上述した方法で行われた。調査時期は、2020年11月～2021年1月である。ここでの有効回収数は1802ケースとなった。

本稿では、第1波調査と第1波追加調査を合算したデータを使用する。ただし、後者は新型コロナウイルス感染症が拡大する中で実施されたため、本稿の分析では年度の影響を考慮する。

表1は、本稿で分析するデータの概要をまとめたものである。専門分野については、「あなたが大学で学んだ専門分野は次のうちどれですか。最も近いものを1つ選んでください」という質問文によって測定している。本稿では、紙幅の都合上、有効回収数の多い言語・文学、法学、経済学、社会学を詳細な分析対象とする。

本稿のデータには、ウェブ調査と実査の特性上、厳密な回収率を算出できないこと、専門分野によって性

別の分布がかなり異なること等といった問題点がある<sup>2)</sup>。この点で本稿の知見を過剰に一般化することには慎重になる必要がある。本稿では、標本が無作為抽出されたと仮定して、参考までに統計的検定を行う。

専門分野別習得度に関する質問項目は、次の3つの段階を経て作成された。

第1に、日本学術会議が公式ウェブサイトで公表している参照基準から「すべての学生が身に付けるべき基本的な素養」が記述されている箇所に着目し、原文をできるだけ尊重しつつ、技術的に社会調査に耐えうる質問項目に落とし込んだ。日本学術会議の公式ウェブサイトにある「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準について（解説）」という文書によれば、上記の「基本的な素養」は、①「分野の学びを通じて獲得される基本的な『知識・理解』」、②「基本的な知識と理解を活用して発揮される『能力』」、③「分野に固有の知的訓練を通じて獲得される『ジェネリックスキル』」に分けて記述されており、「全国の大学とそこで学ぶ学生の多様性も考慮しつつ、各分野の教育が目指すべき『理想』として構想されるものであり、一律に達成すべき最低基準（threshold）のようなものとは異なる」とされている。

第2に、作成した質問項目を研究会で検討・修正した後、各専門分野の研究者に意見を求めて修正を行った。

第3に、日本学術会議の委員にも意見を求めて再度修正を行い、質問項目を確定した。なお、専門分野によっては第2段階と第3段階は同時並行で実施した。具体的な質問項目は5章で紹介する。

こうして作成された参照基準に基づいた専門分野別習得度は、管見の限り、まだ存在していないように思われる。

### 4. 変数の設定

表2は、本稿の分析で使用する変数の操作的定義をまとめたものである。

従属変数は、専門分野別習得度である。10個の専門分野ごとに、参照基準に基づいた8～10個の質問項目（各4件法）を作成した。分析を行う際は、専門分野ごとにこれらの質問項目の平均値を算出した。これ以外の変数については表中を参照されたい。

### 5. 分析

#### 5.1. 専門分野別習得度の実態

表3は、専門分野別習得度の個別の質問項目とその平均値等に関する基本的な情報をまとめたものである。個別の質問項目は4件法の順位尺度であるが、便

表 1. ウェブ調査の概要

専門分野	学部数	N	列%	性別 (行%)			学部の偏差値				
				男性	女性	その他	偏差値データのある N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
言語・文学	60	601	20.8	24.8	74.0	1.2	591	56.2	7.377	35.0	67.5
哲学	20	68	2.4	42.6	55.9	1.5	68	60.5	6.918	42.5	67.5
歴史学	41	192	6.7	40.1	58.3	1.6	191	55.8	7.482	35.0	67.5
法学	27	240	8.3	52.1	47.1	0.8	238	60.6	7.049	45.0	70.0
政治学	24	89	3.1	59.6	40.4	0.0	87	61.5	8.373	42.5	70.0
経済学	35	230	8.0	65.2	33.5	1.3	230	54.6	6.631	35.0	70.0
経営学	32	181	6.3	53.0	47.0	0.0	181	52.4	7.843	35.0	67.5
社会学	57	270	9.4	30.0	69.3	0.7	266	57.1	7.874	35.0	67.5
社会福祉学	25	70	2.4	15.7	78.6	5.7	56	49.3	6.508	37.5	67.5
心理学	42	182	6.3	20.9	79.1	0.0	177	54.0	8.225	35.0	67.5
その他	94	763	26.4	28.6	71.0	0.4	742	51.2	7.553	35.0	67.5
合計	121	2886	100.0	35.8	63.3	0.9	2827	55.0	8.134	35.0	70.0

注 1: 以上のほかに、専門分野の無回答が 100 ケースある。

注 2: 小数点以下の桁数の丸めのため、合計が 100.0%にならない箇所がある。

注 3: 専門分野と学部は必ずしも一対一で対応していないため、学部数の合計は表中のようにになっている。

注 4: 偏差値データの出所については、表 2 を参照されたい。

表 2. 分析で使用する変数の操作的定義

変数名	操作的定義
専門分野別習得度	各専門分野の 8 ~ 10 個の質問項目 (各 4 件法) について、「とてもあてはまる」=4 ~ 「まったくあてはまらない」=1 とした。専門分野別習得度を分析する際は、各専門分野について、8 ~ 10 個の質問項目の平均値を算出した。具体的な質問項目については、表 3 を参照されたい。
授業経験	「あなたがこれまで大学で受けた授業の中で、次のような授業はおおよそどれくらいありましたか」という質問文において、16 個の質問項目 (各 5 件法) を設定した。各質問項目について、「よくあった」=5 ~ 「ほとんどなかった」=1 とした。具体的な質問項目については、表 5 を参照されたい。
学習経験	①「レポートの書き方など大学での学び方に関する授業」という質問項目 (6 件法) について、「とても熱心にとりくんだ」=5 ~ 「そのような授業はなかった」=0 とした。 ②「学生生活全般を振り返って、大学の学習に対するこれまでのあなたの取り組みについて、それぞれあてはまるものを 1 つずつ選んでください」という質問文において、10 個の質問項目 (各 5 件法) を設定した。各質問項目について、「とてもあてはまる」=5 ~ 「まったくあてはまらない」=1 とした。具体的な質問項目については、表 6 を参照されたい。
性別 (男性ダミー)	男性=1、女性=0 とした。
父親の最終学歴 (大卒・大学院卒ダミー)	大卒・大学院卒=1、それ以外=0 とした。
母親の最終学歴 (大卒・大学院卒ダミー)	大卒・大学院卒=1、それ以外=0 とした。
実家の蔵書数	実家の蔵書数について、「ほとんどない」=0、「20 冊くらい (本棚 1 段分くらい)」=0.2、「50 冊くらい (本棚半分くらい)」=0.5、「100 冊くらい (本棚 1 つ分くらい)」=1、「200 冊くらい (本棚 2 つ分くらい)」=2、「300 冊くらい (本棚 3 つ分くらい)」=3、「400 冊以上 (本棚 4 つ以上)」=4.5 という 100 冊単位の値に置き換えた。
中学 3 年生のときの校内成績	5 件法の選択肢について、「上の方」=5 ~ 「下の方」=1 とした。
高校 3 年生のときの校内成績	5 件法の選択肢について、「上の方」=5 ~ 「下の方」=1 とした。
学部の偏差値	大学偏差値テラスというウェブサイトで公表されている河合塾のボーダー偏差値を使用した。
2020 年度調査ダミー	2020 年度調査=1、2019 年度調査=0 とした。
大学の成績	「大学でいままで履修した授業の成績のうち、最上位の評価であったものは、おおよそどれくらいありましたか」という質問文 (11 件法) について、「0 割」=0 ~ 「10 割」=10 とした。
(生活時間) 授業の予復習や課題 (卒論を含む) をやる時間	「今学期の平均的な 1 週間」の生活時間について、「0 時間」=0、「1 時間未満」=0.5、「1 時間以上 3 時間未満」=2、「3 時間以上 5 時間未満」=4、「5 時間以上 10 時間未満」=7.5、「10 時間以上 15 時間未満」=12.5、「15 時間以上 20 時間未満」=17.5、「20 時間以上 30 時間未満」=25、「30 時間以上」=35 とした。
(生活時間) 大学や内定先からの指示以外の自主的な勉強	
(生活時間) 読書 (マンガ、雑誌を除く)	

宜的に数値とみなして平均値・標準偏差を算出している。当然ながら、専門分野によって質問項目の中身が異なるので、専門分野間で専門分野別習得度 (平均値) を比較して安易に高低を論じることは適切ではない。

## 5.2. 学部の偏差値・大学の成績と専門分野別習得度との相関関係

表 4 は、学部の偏差値・大学の成績と専門分野別習得度との相関係数をまとめたものである。それによれば、次の 2 点がわかる。

第 1 に、言語・文学、歴史学、政治学を除いて、学部の偏差値は専門分野別習得度と有意な関連がない

という点である。これらの 3 つの専門分野においても相関の程度は弱い。

第 2 に、法学と社会福祉学を除いて、大学の成績は専門分野別習得度と有意な正の関連があるという点である。なお、学部の偏差値を統制して、大学の成績と専門分野別習得度との偏相関係数を算出すると、ほぼ同様の傾向となる。

以上から、専門分野別習得度は大学入学後に形成される側面の大きい変数であると考えられる。ここから、当該習得度は自己評価指標といえども、一定程度の適切性を有する変数であるように思われる。

表 3. 専門分野別習得度の概要

専門分野	質問項目	平均値	標準偏差
言語・文学 各 N=601	1 言語や文学が、歴史的に発展してきたものであることを理解している	3.343	0.730
	2 言語・言語表現が精神活動や社会・文化において果たしている役割について理解が向上している	3.235	0.735
	3 第一言語（母語・現代日本語）を通じた限られた経験をこえて、客観的で広い視野から言葉をとらえられる	3.176	0.727
	4 習得した外国語や古語などの知識によって、言葉一般や現代日本語についても関心と理解が深まった	3.145	0.786
	5 自分の思考と判断を、言葉によってより適切に表現することができるようになった	3.077	0.691
	6 テクストをその背景に照らして読み解く訓練によって、「いま、ここ」にいない他者を理解する能力が向上した	2.982	0.811
	7 文章構造やレトリックなど言語のさまざまなあり方を学ぶことによって、文章や発言一般を正確に、また批判的に捉える能力が向上した	2.892	0.804
	8 個別言語の構造を把握するための文法概念（音節、主語、時制など）の理解が身についている	2.870	0.816
	9 多様な表現媒体（言葉、身体動作、画像、映像等）とその特徴についての知識・理解が身についている	2.780	0.824
	10 音声を作り出す生理的メカニズム（調音・構音）の理解が身についている	2.453	0.932
専門分野別習得度（上記項目の平均値） Cronbach's $\alpha=0.825$		2.995	0.492
哲学 各 N=68	1 なじみのない考え方や感じ方もできる限り理解しようとする姿勢が身についている	3.382	0.647
	2 他者の主張をよく聴き、共生する姿勢が身についている	3.368	0.596
	3 関心をもつ思想や社会事象を、多角的な視点から捉えることができる	3.294	0.624
	4 従来の考えを吟味し、創造的な探求を継続する姿勢が身についている	3.265	0.638
	5 様々な分野を横断する根本的な問いに取り組み姿勢が身についている	3.191	0.605
	6 他者との対話により、自分を成長させようとする姿勢が身についている	3.191	0.758
	7 現在の課題に取り組むのに、人類の知的遺産を活用する姿勢が身についている	3.162	0.704
	8 自分（じぶん）の概念や思想を理解し、さらに新しくしようとする	3.118	0.783
	9 自分（じぶん）の考え方を日常生活に活用することができる	2.985	0.743
	10 現実の社会から学び、社会に貢献しようとする姿勢が身についている	2.897	0.849
専門分野別習得度（上記項目の平均値） Cronbach's $\alpha=0.834$		3.185	0.443
歴史学 各 N=192	1 国家や社会や人間のあり方を、歴史的に形成されたものとして考えることができる	3.417	0.666
	2 他者の歴史観を尊重する姿勢が身についている	3.328	0.664
	3 歴史観の多様性についての理解が身についている	3.297	0.631
	4 自分とは異なる文化や価値観に対する寛容かつ批判的な態度が身についている	3.271	0.701
	5 一国（自国）中心の歴史を相対化し、より広い視野で歴史を捉える姿勢が身についている	3.188	0.756
	6 生涯にわたって歴史を学び続ける姿勢が身についている	3.161	0.819
	7 様々な形の史資料を客観的に選別することができる	2.948	0.811
	8 資料の発掘・踏査の方法や現場での記録法が身についている	2.313	0.985
専門分野別習得度（上記項目の平均値） Cronbach's $\alpha=0.832$		3.115	0.517
法学 各 N=240	1 法令の基礎には基本原則（罪刑法定主義など）が存在することを理解している	3.600	0.612
	2 法を運用する諸機関（裁判所など）の役割を理解している	3.496	0.614
	3 法的判断とは法令が予定する価値にもとづいた規範的なものであることを理解している	3.346	0.685
	4 国民主権・三権分立・基本的人権の尊重という3つの要素がなぜ重要なのか理解している	3.288	0.724
	5 私人間（しじんかん）の権利・義務に関する基本的なルールとそれを実現する手続を理解している（民事法学に関する知識）	3.017	0.749
	6 公権力の存在理由とその行使が許される条件を理解している（公法学に関する知識）	2.933	0.826
	7 刑罰権の行使を可能にする条件と手続を理解している（刑事法学に関する知識）	2.913	0.831
	8 法令にもとづきながら論理的に他人を説得できる	2.879	0.796
	9 法令にもとづきながら異なる利害を有する当事者の意見を調整できる	2.813	0.850
	10 多くの国が関係する国際的な法律問題をその背景から理解している	2.729	0.876
専門分野別習得度（上記項目の平均値） Cronbach's $\alpha=0.878$		3.101	0.526
政治学 各 N=89	1 メディアの報道をうのみにせず、自ら検証を試みようとする	3.236	0.658
	2 市民として現実の政治について成熟した選択をすることができる	2.989	0.666
	3 国内政治や国際政治の動きや連関について、学問的知識にもとづいて説明できる	2.978	0.768
	4 感情的な思い込みを左右されず、統計情報を読み解くことができる	2.955	0.706
	5 現実に政治はどのように動いているのかを説明できる	2.910	0.717
	6 政策の決定過程について説明できる	2.888	0.714
	7 集団内のある決定が正当かどうかを検討できる	2.888	0.647
	8 多様な個人や集団において、権力がどのように行使されているかを判断することができる	2.854	0.762
	9 政治において直面する課題を客観的に理解し、よりよい政策を考えることができる	2.809	0.737
	10 自由民主主義体制にはどのような思想的・歴史的背景があるのか説明できる	2.787	0.746
専門分野別習得度（上記項目の平均値） Cronbach's $\alpha=0.856$		2.929	0.471
経済学 各 N=230	1 市場における需要量と供給量の決定や「価格」の役割についての知識・理解が身についている	3.226	0.599
	2 「限界費用」などの語で用いられる「限界」概念についての知識・理解が身についている	3.126	0.769
	3 市場の「均衡」と「不均衡」についての知識・理解が身についている	3.122	0.622
	4 「機会費用」についての知識・理解が身についている	3.074	0.787
	5 国民総支出（Y）に関する式 $Y=C+I+G+X-M$ や国民経済計算体系についての知識・理解が身についている	2.935	0.836
	6 インセンティブと人々の行動の関係についての知識・理解が身についている	2.926	0.776
	7 個別の事象やデータから一般的な法則を引き出すことができる	2.552	0.784
	8 複雑データを数学的・統計的に分析し、説明することができる	2.504	0.885
	9 数値問題を分析するために「モデル」を用い問題を抽象化して考えることができる	2.500	0.840
	10 仮定に基づいた理論モデルから論理的に法則を引き出すことができる	2.404	0.802
専門分野別習得度（上記項目の平均値） Cronbach's $\alpha=0.900$		2.837	0.562
経営学 各 N=181	1 顧客のニーズを把握し、顧客が満足する商品を開発・販売する上で必要な理論や手法を理解している	2.950	0.769
	2 企業等の継続的事業体が社会の発展の中で果たす役割についての理解が身についている	2.851	0.719
	3 企業等の継続的事業体に関する基本的知識（組織構造、販売促進策や有価証券報告書の読み方など）が身についている	2.796	0.705
	4 経営に関する他者の意見を理解し、適切に評価することができる	2.696	0.731
	5 経営に関する専門用語（事業部制や転換社債など）の知識・理解が身についている	2.674	0.706
	6 経営に関する事柄について、適切に解釈・評価することができる	2.674	0.729
	7 企業等の継続的事業体の経営上の課題を見つけ、その背後の構造や要因を分析できる	2.646	0.743
	8 継続的事業体の経営の現状や今後について、根拠をもとに自分の意見を述べるすることができる	2.624	0.747
	9 経営活動の帳簿記録から財務諸表の作成までの理論や手法を理解している	2.486	0.879
	10 経営における利益管理、予算管理、原価管理、品質管理、現場管理に関する知識と相互関係を理解している	2.387	0.806
専門分野別習得度（上記項目の平均値） Cronbach's $\alpha=0.889$		2.678	0.534
社会学 各 N=270	1 社会が相互行為から成り立ち、その中で意味やアイデンティティが形成されていくことを理解している	3.107	0.695
	2 社会で起こる問題を見つけ、それを自分と関連づけて考えられる	3.107	0.695
	3 ジェンダーやセクシュアリティについての知識・理解が身についている	3.048	0.707
	4 格差や貧困などの階層・階級・社会的不平等についての知識・理解が身についている	3.011	0.714
	5 都市・農村などの地域社会・コミュニティについての知識・理解が身についている	2.896	0.749
	6 テーマに応じた適切な調査方法を選び、実施できる	2.878	0.714
	7 社会調査の結果を適切に読み解くことができる	2.833	0.667
	8 社会現象を、社会学の概念や理論枠組みと関連づけて説明できる	2.726	0.756
	9 情報をめぐる技術、インターネット、ソーシャルメディアなどの環境変化や社会的影響についての知識・理解が身についている	2.681	0.782
	10 自殺や犯罪などの逸脱行動や社会病理についての知識・理解が身についている	2.385	0.849
専門分野別習得度（上記項目の平均値） Cronbach's $\alpha=0.791$		2.867	0.432
社会福祉学 各 N=70	1 人びとの多様な価値観を受容することができる	3.614	0.519
	2 個人の尊厳を重視し支援を行うことができる	3.514	0.558
	3 差別や社会的排除の問題に気づくことができる	3.357	0.615
	4 一人ひとりの権利（人権）擁護についての知識・理解が身についている	3.171	0.613
	5 支援を必要とする人の力を高め、その人の社会参加を支援することができる	3.143	0.687
	6 生活問題を発見し、社会の問題として普遍化することができる	3.057	0.657
	7 支援に係るさまざまな社会資源を調整・開発することについての知識・理解が身についている	2.986	0.625
	8 効果的かつ効率的な社会福祉の運営についての知識・理解が身についている	2.643	0.638
専門分野別習得度（上記項目の平均値） Cronbach's $\alpha=0.837$		3.186	0.421
心理学 各 N=182	1 心と行動の個人差や、同じ人でも発達的変化や状況による揺らぎがあることへの理解が身についている	3.390	0.662
	2 心に関する知識と実証研究の成果に基づいて、人間を客観的に理解することができる	2.907	0.726
	3 心理アセスメント、カウンセリング、実験法・測定法に関する理解が身についている	2.879	0.741
	4 心と行動に関する人間に共通の法則性や規則性についての理解が身についている	2.830	0.603
	5 人間と環境（自然や社会）との相互作用を理解することができる	2.775	0.779
	6 人間の心についての理解を実務に生かすことができる	2.736	0.763
	7 心を生み出す生物学的・認知的・社会文化的しくみと各領域の諸理論に関する理解が身についている	2.626	0.633
	8 実社会における心理学の応用例（消費行動、犯罪防止、交通心理など）に関する理解が身についている	2.588	0.713
	9 「知」「情」「意」の三側面からなる心のはたらきについての、実証に基づいた理解が身についている	2.462	0.670
専門分野別習得度（上記項目の平均値） Cronbach's $\alpha=0.831$		2.799	0.457



表 4. 学部の偏差値・大学の成績と専門分野別習得度との相関関係

学部の偏差値・ 大学の成績		専門分野別習得度									
		言語・文学	哲学	歴史学	法学	政治学	経済学	経営学	社会学	社会福祉学	心理学
大学の成績	上段の N	591	68	191	238	87	230	181	266	56	177
	下段の N	601	68	192	240	89	230	181	270	70	182
学部の偏差値	相関係数	0.135	0.082	0.147	0.059	0.222	0.057	-0.089	0.015	0.232	0.118
		**		*		*				+	
大学の成績	相関係数	0.129	0.316	0.234	0.111	0.242	0.235	0.217	0.197	0.135	0.230
		**	**	**	+	*	***	**	**		**

注：+： $p < 0.10$ 、\*： $p < 0.05$ 、\*\*： $p < 0.01$ 、\*\*\*： $p < 0.001$ 。

### 5.3. 専門分野別にみた授業経験

表 5 は、専門分野別に授業経験の分布をまとめたものである。サンプルサイズの問題等があるため、安易な特徴の記述は適切ではないものの、学内に閉じているが懇切丁寧な言語・文学、哲学、歴史学（質問項目番号 3・7・12）、マスプロ型・試験一発勝負型で双方向性の乏しい法学、経済学、経営学（2・14）、実践性が際立つ社会福祉学（9）といった傾向があるように思われる。

### 5.4. 専門分野別にみた学習経験

表 6 は、専門分野別に学習経験の分布をまとめたものである。ここでも同様の留保が必要であるものの、全体的に熱心な言語・文学、歴史学、関連づけ、履修体系の政治学（7・8）、学びの活用の社会福祉学（9・10）といった傾向があるように思われる。

### 5.5. 授業経験と専門分野別習得度との相関関係

ここから相関関係の分析に入る。

表 7 は、専門分野別に授業経験と専門分野別習得度との相関係数をまとめたものである。それによれば、少人数（3）、興味がわくように工夫（8）、実践的（9）、意義の説明（11）、コメント返却（12）といった学習支援型授業が多くの専門分野別習得度と有意な正の関連があることがわかる。ただし、関連の強さは小～中程度である。以降の分析では、相関係数の値が相対的に大きい（8）、（9）、（11）に着目する。

### 5.6. 学習経験と専門分野別習得度との相関関係

表 8 は、専門分野別に学習経験と専門分野別習得度との相関係数をまとめたものである。それによれば、先ほどの授業経験のときと比べて、学習経験では多くの項目で小～中程度の有意な関連があることがわかる（正の関連だけでなく、負の関連もある）。以降の分析では、相関係数の値が相対的に大きい、自分で調べてみた（探究的な学習）（4）、関連づけて理解（7）、授業外での活用（9）に着目する。

### 5.7. 専門分野別習得度の規定要因

最後に、サンプルサイズの大きい言語・文学、法学、

経済学、社会学を分析対象として、専門分野別習得度の規定要因を詳しく分析する。

表 9 は、分析で使用される変数の記述統計量をまとめたものである。表 10 は、専門分野別習得度を従属変数とした重回帰分析の結果をまとめたものである<sup>3)</sup>。それによれば、次の 3 点がわかる。

第 1 に、総じて、「授業に関連して、わからないことや関心のあることが出てきたら自分で調べてみた」、「複数の授業で学んだことを関連づけて理解していた」、「授業で学んだことを授業外で活かした」といった学習経験に相対的に強い有意な正の関連がみられるという点である。

第 2 に、授業経験については、いずれの専門分野においても有意な関連はみられないという点である。

第 3 に、高等教育政策で話題になることが多い学習時間については、言語・文学と経済学の「大学や内定先からの指示以外の自主的な勉強」を除いて有意な関連はみられないという点である。前者では正の関連があり、後者では負の関連がある<sup>4)</sup>。

重回帰分析の結果について考察する。

第 1 に、学習経験に有意な正の関連がみられたのは、先行研究の指摘と整合的である。葛城（2006: 171）は、「能力の変化」と「専門の到達度」の「いずれの指標についても『教育の質』、つまり『いかなる教育が与えられたか』よりも、『学習経験の質』、つまり『いかなる学習を行ったか』ということに規定されている」と述べている。

第 2 に、授業経験に有意な関連がみられなかったのも、葛城（2006: 171）の指摘と整合的である。確かに、小方（2008）、両角（2010）、金子（2013）等の一部の知見とは異なる結果が得られたが、そこには分析に投入した変数の違いや分析手法（専門分野別か否か）の違いが関係しているように思われる。

第 3 に、学習時間について、言語・文学と経済学の一部を除いて有意な関連がみられなかったのは、専門分野別習得度は単純に時間を投入すれば上がるものではなく、学び方（過程）を考慮する必要があるということであろう。上述した知見は、専門分野別習得度が単純な知識（量）を測定する指標ではなく、思考力等も測定する指標となりえているという解釈もできる。

表 5. 専門分野別にみた授業経験

授業経験		N	(列%)									
			言語・文学	哲学	歴史学	法学	政治学	経済学	経営学	社会学	社会福祉学	心理学
1	一方向的な講義形式の授業	よくあった	63.4	80.9	75.5	85.4	78.7	67.8	60.8	73.0	48.6	72.5
		ある程度あった	33.3	17.6	20.8	12.9	20.2	27.0	35.4	23.3	42.9	24.2
		どちらともいえない	1.2	1.5	2.6	1.3	0.0	3.0	1.7	1.5	7.1	1.1
		あまりなかった	1.7	0.0	1.0	0.4	1.1	1.7	1.7	2.2	1.4	2.2
		ほとんどなかった	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.6	0.0	0.0	0.0
2	大講義形式（出席者数が100人以上）の授業	よくあった	23.0	38.2	29.2	64.6	56.2	52.6	55.8	35.6	24.3	28.6
		ある程度あった	51.6	39.7	47.9	27.5	32.6	40.4	38.7	48.1	42.9	55.5
		どちらともいえない	5.3	5.9	5.2	2.9	3.4	1.7	2.8	1.9	2.9	4.9
		あまりなかった	15.8	16.2	15.1	3.3	5.6	3.9	1.7	11.1	25.7	7.7
		ほとんどなかった	4.3	0.0	2.6	1.7	2.2	1.3	1.1	3.3	4.3	3.3
3	少人数の演習形式の授業	よくあった	42.8	39.7	41.7	9.2	11.2	9.1	11.6	23.0	45.7	24.2
		ある程度あった	45.4	48.5	47.4	50.8	55.1	56.1	49.7	53.0	40.0	59.3
		どちらともいえない	3.5	2.9	3.1	5.4	10.1	7.0	6.1	5.2	2.9	2.2
		あまりなかった	6.8	8.8	7.8	28.8	21.3	24.8	29.3	17.4	8.6	12.6
		ほとんどなかった	1.5	0.0	0.0	5.8	2.2	3.0	3.3	1.5	2.9	1.6
4	議論やグループワークなど学生が参加する機会がある授業	よくあった	22.8	19.1	17.7	5.8	11.2	4.8	14.4	20.4	38.6	16.5
		ある程度あった	53.6	54.4	53.6	42.5	48.3	43.0	40.9	53.0	38.6	56.0
		どちらともいえない	6.7	7.4	8.9	12.9	11.2	10.4	11.0	8.9	12.9	10.4
		あまりなかった	14.8	16.2	15.6	32.9	25.8	34.3	28.7	16.3	10.0	15.9
		ほとんどなかった	2.2	2.9	4.2	5.8	3.4	7.4	5.0	1.5	0.0	1.1
5	プレゼンテーションの機会を取り入れた授業	よくあった	16.8	4.4	11.5	5.4	9.0	4.3	13.3	10.7	8.6	13.7
		ある程度あった	48.6	45.6	44.3	28.8	27.0	31.3	35.9	40.4	38.6	46.2
		どちらともいえない	7.5	8.8	8.3	10.0	15.7	9.1	11.0	7.8	8.6	8.2
		あまりなかった	20.8	32.4	26.0	40.4	36.0	41.3	32.0	31.9	37.1	23.1
		ほとんどなかった	6.3	8.8	9.9	15.4	12.4	13.9	7.7	9.3	7.1	8.8
6	実験や調査の機会を取り入れた授業	よくあった	2.8	1.5	6.8	1.3	2.2	1.3	2.8	7.4	1.4	20.3
		ある程度あった	14.0	8.8	18.8	6.3	18.0	14.8	16.0	32.2	22.9	47.3
		どちらともいえない	11.5	10.3	10.9	10.8	9.0	6.5	11.6	13.7	14.3	8.2
		あまりなかった	37.8	44.1	30.7	28.8	31.5	33.9	28.7	32.2	40.0	19.2
		ほとんどなかった	33.9	35.3	32.8	52.9	39.3	43.5	40.9	14.4	21.4	4.9
7	企業や地域等と連携し、プロジェクトにとりくむ授業	よくあった	1.5	1.5	3.6	2.1	1.1	3.9	9.4	5.2	1.4	1.1
		ある程度あった	9.7	8.8	6.3	8.8	18.0	17.8	20.4	18.5	8.6	11.5
		どちらともいえない	6.5	4.4	7.8	9.2	7.9	7.4	6.6	8.9	8.6	7.1
		あまりなかった	24.3	16.2	18.8	17.9	20.2	24.3	28.2	25.9	34.3	23.1
		ほとんどなかった	58.1	69.1	63.5	62.1	52.8	46.5	35.4	41.5	47.1	57.1
8	授業内容に興味がわくように工夫された授業	よくあった	20.5	23.5	18.8	12.5	21.3	7.4	10.5	12.6	12.9	10.4
		ある程度あった	50.2	45.6	41.7	46.7	43.8	45.7	47.0	48.1	51.4	54.4
		どちらともいえない	19.3	22.1	28.1	23.8	22.5	29.1	23.2	23.0	24.3	16.5
		あまりなかった	8.5	7.4	6.8	14.6	9.0	14.3	16.0	13.3	11.4	18.1
		ほとんどなかった	1.5	1.5	4.7	2.5	3.4	3.5	3.3	3.0	0.0	0.5
9	将来に役立つ実践的な知識や技能が身につく授業	よくあった	17.0	11.8	11.5	18.8	19.1	9.1	13.8	5.6	35.7	11.0
		ある程度あった	39.1	25.0	32.8	40.0	51.7	42.6	44.2	41.9	47.1	50.0
		どちらともいえない	21.8	29.4	29.2	24.6	10.1	25.2	20.4	23.0	10.0	18.7
		あまりなかった	17.5	26.5	16.1	12.5	14.6	18.3	17.1	23.7	5.7	19.8
		ほとんどなかった	4.7	7.4	10.4	4.2	4.5	4.8	4.4	5.9	1.4	0.5
10	就職対策や人生設計などキャリア形成に関する授業	よくあった	8.8	4.4	6.8	6.3	10.1	7.4	17.7	6.7	5.7	7.7
		ある程度あった	28.1	25.0	19.8	26.7	23.6	30.0	39.2	31.9	32.9	31.3
		どちらともいえない	14.1	16.2	13.0	13.8	15.7	18.7	14.9	15.9	18.6	14.8
		あまりなかった	27.6	20.6	25.5	27.5	25.8	25.7	15.5	30.7	25.7	26.9
		ほとんどなかった	21.3	33.8	34.9	25.8	24.7	18.3	12.7	14.8	17.1	19.2
11	授業内容の意義や必要性を説明してくれる授業	よくあった	12.5	20.6	16.7	11.3	16.9	8.3	7.2	7.8	14.3	7.1
		ある程度あった	39.6	38.2	34.4	39.2	40.4	37.4	41.4	37.0	41.4	34.6
		どちらともいえない	20.6	17.6	22.4	23.3	14.6	27.8	23.8	21.5	24.3	23.6
		あまりなかった	21.1	16.2	17.2	17.9	14.6	20.4	19.9	26.3	12.9	26.9
		ほとんどなかった	6.2	7.4	9.4	8.3	13.5	6.1	7.7	7.4	7.1	7.7
12	提出物に教員からのコメントが付されて返却される授業	よくあった	9.3	10.3	8.9	2.5	2.2	3.5	5.0	3.7	2.9	4.9
		ある程度あった	31.9	29.4	27.6	16.3	24.7	16.1	17.7	22.2	14.3	28.0
		どちらともいえない	13.5	7.4	15.1	11.3	10.1	11.7	8.8	10.0	11.4	15.4
		あまりなかった	28.6	26.5	29.2	35.8	33.7	31.7	33.1	32.6	42.9	34.1
		ほとんどなかった	16.6	26.5	19.3	34.2	29.2	37.0	35.4	31.5	28.6	17.6
13	課題や宿題がたくさん出される授業	よくあった	26.1	8.8	13.0	8.3	10.1	11.7	10.5	7.4	7.1	18.1
		ある程度あった	45.8	39.7	48.4	32.1	37.1	40.0	43.1	42.2	51.4	46.7
		どちらともいえない	10.1	17.6	15.1	15.0	18.0	18.7	18.2	21.1	11.4	15.9
		あまりなかった	16.0	23.5	19.8	28.3	23.6	23.5	20.4	25.9	27.1	15.9
		ほとんどなかった	2.0	10.3	3.6	16.3	11.2	6.1	7.7	3.3	2.9	3.3
14	テストで成績が評価される授業	よくあった	46.6	36.8	45.8	84.6	79.8	75.7	67.4	39.6	31.4	49.5
		ある程度あった	43.6	54.4	45.3	12.9	15.7	20.9	29.8	50.7	45.7	42.9
		どちらともいえない	4.5	5.9	4.7	2.5	4.5	1.7	1.1	4.1	12.9	2.7
		あまりなかった	4.5	2.9	3.6	0.0	0.0	1.3	1.1	4.4	7.1	4.9
		ほとんどなかった	0.8	0.0	0.5	0.0	0.0	0.4	0.6	1.1	2.9	0.0
15	出席が重視される授業	よくあった	47.1	30.9	42.2	20.0	18.0	25.7	28.2	40.0	31.4	49.5
		ある程度あった	42.4	52.9	41.1	33.8	46.1	53.0	52.5	45.6	45.7	39.6
		どちらともいえない	5.8	7.4	10.9	10.4	11.2	7.8	10.5	8.1	8.6	4.4
		あまりなかった	4.0	8.8	5.2	22.1	20.2	10.9	8.3	5.9	12.9	6.6
		ほとんどなかった	0.7	0.0	0.5	13.8	4.5	2.6	0.6	0.4	1.4	0.0
16	日本語以外の言語で行われる授業（語学科目は除く）	よくあった	12.3	1.5	4.7	2.5	7.9	2.6	3.9	4.1	1.4	3.8
		ある程度あった	30.9	10.3	17.2	21.7	25.8	20.4	22.7	21.5	14.3	17.6
		どちらともいえない	9.5	7.4	6.3	12.1	10.1	10.4	9.9	8.5	4.3	4.4
		あまりなかった	19.3	29.4	20.3	25.0	21.3	20.0	19.9	25.9	24.3	22.0
		ほとんどなかった	28.0	51.5	51.6	38.8	34.8	46.5	43.6	40.0	55.7	52.2

注1：小数点以下の桁数の丸めのため、合計が100.0%にならない箇所がある。  
 注2：独立性の検定によれば、すべて有意差がある（参考）。

表 6. 専門分野別にみた学習経験

学習経験		(列%)										
		言語・文学	哲学	歴史学	法学	政治学	経済学	経営学	社会学	社会福祉学	心理学	
		N	601	68	192	240	89	230	181	270	70	182
1	レポートの書き方など 大学での学び方に関する 授業（熱心度）	とても熱心にとりくんだ	21.3	20.6	30.2	15.4	16.9	17.4	18.2	14.8	18.6	23.1
		やや熱心にとりくんだ	47.3	45.6	37.0	37.5	49.4	49.6	57.5	48.5	52.9	53.3
		どちらともいえない	11.3	8.8	14.1	15.4	14.6	14.8	7.2	14.8	15.7	8.8
		あまり熱心にとりくんでいない	10.1	10.3	8.9	14.6	5.6	11.7	11.6	13.0	8.6	11.0
		まったく熱心にとりくんでいない	1.5	5.9	1.0	3.8	3.4	2.2	1.7	2.2	0.0	0.0
		そのような授業はなかった	8.5	8.8	8.9	13.3	10.1	4.3	3.9	6.7	4.3	3.8
2	興味がわからない授業で もまじめに受けていた	とてもあてはまる	20.1	13.2	22.4	19.2	22.5	23.9	21.0	14.4	15.7	16.5
		ややあてはまる	46.8	38.2	42.7	42.1	39.3	42.2	43.6	48.1	50.0	46.7
		どちらともいえない	14.3	10.3	18.2	12.5	12.4	14.8	14.4	11.5	14.3	15.4
		あまりあてはまらない	15.6	32.4	14.1	21.3	18.0	16.5	16.0	22.2	20.0	17.0
		まったくあてはまらない	3.2	5.9	2.6	5.0	7.9	2.6	5.0	3.7	0.0	4.4
		とてもあてはまる	40.6	27.9	40.6	34.2	36.0	38.3	39.2	30.4	37.1	43.4
3	なるべく良い成績をとる ようにしていた	ややあてはまる	39.6	30.9	36.5	37.9	37.1	32.6	35.9	43.3	44.3	41.2
		どちらともいえない	7.3	11.8	9.4	14.6	7.9	14.3	12.2	10.7	8.6	6.0
		あまりあてはまらない	9.3	23.5	10.4	10.4	13.5	10.9	9.4	13.3	10.0	8.2
		まったくあてはまらない	3.2	5.9	3.1	2.9	5.6	3.9	3.3	2.2	0.0	1.1
		とてもあてはまる	22.8	23.5	27.1	20.0	23.6	16.1	14.9	17.8	18.6	13.7
		ややあてはまる	50.6	55.9	49.0	49.6	49.4	48.3	48.1	48.9	34.3	45.6
4	授業に関連して、わか らないことや関心のある ことが出てきたら自 分で調べてみた	どちらともいえない	14.5	11.8	13.5	18.3	13.5	19.6	22.7	18.1	21.4	19.2
		あまりあてはまらない	11.3	5.9	8.3	9.2	11.2	15.2	13.3	11.9	24.3	20.3
		まったくあてはまらない	0.8	2.9	2.1	2.9	2.2	0.9	1.1	3.3	1.4	1.1
		とてもあてはまる	3.3	4.4	7.8	7.9	5.6	7.8	6.6	3.7	2.9	2.2
		ややあてはまる	16.0	14.7	10.9	15.8	20.2	27.4	21.5	9.6	7.1	15.9
		どちらともいえない	11.0	13.2	18.8	17.9	7.9	18.7	17.1	16.7	11.4	11.5
5	自分の学んでいる専門 分野に興味があつた なかった	あまりあてはまらない	37.3	30.9	25.0	41.7	38.2	30.9	32.0	46.3	44.3	37.9
		まったくあてはまらない	32.4	36.8	37.5	16.7	28.1	15.2	22.7	23.7	34.3	32.4
		とてもあてはまる	3.8	2.9	5.7	5.0	5.6	5.2	5.0	2.2	1.4	2.7
		ややあてはまる	17.1	29.4	13.5	21.3	11.2	27.4	29.8	18.9	7.1	21.4
		どちらともいえない	19.6	20.6	21.9	25.0	15.7	23.0	23.2	21.9	24.3	19.2
		あまりあてはまらない	49.9	38.2	44.3	42.5	60.7	38.3	33.7	49.3	55.7	47.3
6	内容が理解できない授 業が多かった	まったくあてはまらない	9.5	8.8	14.6	6.3	6.7	6.1	8.3	7.8	11.4	9.3
		とてもあてはまる	21.1	20.6	22.4	14.2	29.2	16.1	17.1	16.7	20.0	12.1
		ややあてはまる	50.4	57.4	46.9	52.1	55.1	50.0	42.5	53.0	54.3	47.3
		どちらともいえない	14.3	4.4	17.7	16.3	10.1	20.0	21.5	15.6	10.0	13.7
		あまりあてはまらない	12.3	14.7	9.9	16.3	5.6	11.7	15.5	13.0	12.9	23.1
		まったくあてはまらない	1.8	2.9	3.1	1.3	0.0	2.2	3.3	1.9	2.9	3.8
7	複数の授業で学んだこ とを関連づけて理解し ていた	とてもあてはまる	22.8	13.2	17.2	15.8	21.3	16.1	16.0	10.7	18.6	13.2
		ややあてはまる	38.9	27.9	33.9	41.7	38.2	39.1	39.8	37.4	24.3	36.3
		どちらともいえない	13.8	10.3	14.1	15.8	18.0	18.7	19.3	15.6	22.9	14.8
		あまりあてはまらない	19.3	39.7	28.1	21.3	15.7	19.6	17.1	27.0	25.7	26.9
		まったくあてはまらない	5.2	8.8	6.8	5.4	6.7	6.5	7.7	9.3	8.6	8.8
		とてもあてはまる	18.8	7.4	15.1	12.1	23.6	7.4	9.9	10.0	27.1	10.4
8	履修体系を考えて徐々 に発展的な内容の授 業を履修するようにし ていた	ややあてはまる	38.8	48.5	29.7	31.3	36.0	33.9	34.3	34.1	50.0	40.1
		どちらともいえない	17.0	14.7	22.4	18.3	15.7	19.1	25.4	20.7	10.0	17.0
		あまりあてはまらない	18.3	19.1	25.0	27.9	19.1	32.2	20.4	28.1	11.4	25.3
		まったくあてはまらない	7.2	10.3	7.8	10.4	5.6	7.4	9.9	7.0	1.4	7.1
		とてもあてはまる	11.6	4.4	9.9	8.3	13.5	8.7	11.0	11.1	21.4	6.0
		ややあてはまる	27.8	23.5	17.7	25.4	28.1	25.2	31.5	30.0	42.9	34.6
9	授業で学んだことを授 業外で活かした	どちらともいえない	16.3	17.6	20.3	14.2	18.0	10.4	21.0	17.8	17.1	15.9
		あまりあてはまらない	28.3	30.9	33.3	28.3	22.5	34.3	23.2	28.5	12.9	28.0
		まったくあてはまらない	16.0	23.5	18.8	23.8	18.0	21.3	13.3	12.6	5.7	15.4
		とてもあてはまる	3.8	1.5	4.7	6.3	4.5	7.8	6.1	4.1	2.9	4.9
		ややあてはまる	33.4	25.0	28.1	40.4	36.0	42.6	44.2	30.0	35.7	42.3
		どちらともいえない	28.5	19.1	24.0	27.5	22.5	25.2	23.2	22.6	28.6	20.3
10	授業外（アルバイト、 サークル、インターン シップなど）で学んだこ とを授業で活かした	あまりあてはまらない	28.3	47.1	33.9	17.9	33.7	23.0	22.1	35.2	22.9	26.4
		まったくあてはまらない	6.0	7.4	9.4	7.9	3.4	1.3	4.4	8.1	10.0	6.0

注1：小数点以下の桁数の丸めのため、合計が100.0%にならない箇所がある。

注2：独立性の検定によれば、「2」を除いて、有意差がある（参考）。



表 7. 授業経験と専門分野別習得度との相関関係

授業経験	N	専門分野別習得度										有意な関連のある 専門分野数
		言語・文学	哲学	歴史学	法学	政治学	経済学	経営学	社会学	社会福祉学	心理学	
		601	68	192	240	89	230	181	270	70	182	
1 一方向的な講義形式の授業	相関係数	-0.015	-0.031	-0.032	-0.021	0.005	-0.036	-0.098	0.024	-0.120	-0.053	0
2 大講義形式（出席者数が100人以上）の授業	相関係数	-0.002	-0.074	-0.109	0.068	0.061	-0.019	0.007	0.107	-0.148	-0.003	0
3 少人数の演習形式の授業	相関係数	0.150 ***	0.240 *	0.176 *	0.195 **	0.209 *	0.151 *	0.041 *	0.128 *	-0.024	0.043	7
4 議論やグループワークなど学生が参加する機会がある授業	相関係数	0.128 **	0.234 +	0.223 **	0.184 **	0.159	0.126 +	0.112 +	0.105 +	-0.027	0.108	3
5 プレゼンテーションの機会を取り入れた授業	相関係数	0.216 ***	0.221 +	0.253 ***	0.148 *	0.169	0.182 **	0.212 **	0.071	0.046	0.032	5
6 実験や調査の機会を取り入れた授業	相関係数	0.154 ***	0.137	0.271 ***	0.092	-0.007	0.080	0.154 *	0.144 *	0.130	0.189 *	5
7 企業や地域等と連携し、プロジェクトに とりむ授業	相関係数	0.126 **	0.094	0.089	0.012	-0.134	0.003	0.154 *	0.173 **	-0.056	-0.023	3
8 授業内容に興味がわくように工夫された 授業	相関係数	0.235 ***	0.364 **	0.391 ***	0.226 ***	0.206 +	0.189 **	0.273 ***	0.289 ***	0.100	0.257 ***	8
9 将来に役立つ実践的な知識や技能が 身につく授業	相関係数	0.157 ***	0.145	0.353 ***	0.201 **	0.168	0.203 **	0.319 ***	0.299 ***	-0.021	0.177 *	7
10 就職対策や人生設計などキャリア形 成に関する授業	相関係数	0.006	0.102	0.169 *	0.073	0.015	-0.022	0.245 **	0.215 ***	0.117	0.164 *	4
11 授業内容の意義や必要性を説明してく れる授業	相関係数	0.167 ***	0.140	0.304 ***	0.210 **	0.117	0.223 **	0.296 ***	0.258 ***	0.164	0.269 ***	7
12 提出物に教員からのコメントが付され て返却される授業	相関係数	0.117 **	0.024	0.292 ***	0.176 **	0.101	0.056	0.156 *	0.179 **	0.115	0.187 *	6
13 課題や宿題がたくさん出される授業	相関係数	0.208 ***	-0.065	0.149 *	0.084	-0.004	-0.009	0.018	0.234 ***	0.098	0.186 *	4
14 テストで成績が評価される授業	相関係数	0.049	0.306 *	0.108	-0.037	0.125	-0.065	0.016	0.127 *	-0.015	0.004	2
15 出席が重視される授業	相関係数	-0.017	0.241 *	-0.022	0.014	-0.141	-0.132 *	0.117	0.090	0.094	0.021	2
16 日本語以外の言語で行われる授業 （語学科目は除く）	相関係数	0.118 **	0.007	0.178 *	0.063	0.193 +	0.072	0.196 **	0.215 ***	0.070	-0.004	4

注1：+：p<0.10、\*：p<0.05、\*\*：p<0.01、\*\*\*：p<0.001。  
注2：網掛け部分は各専門分野内における相関係数の最大値を指す。

表 8. 学習経験と専門分野別習得度との相関関係

学習経験	N	専門分野別習得度										有意な関連のある 専門分野数
		言語・文学	哲学	歴史学	法学	政治学	経済学	経営学	社会学	社会福祉学	心理学	
		601	68	192	240	89	230	181	270	70	182	
1 レポートの書き方など大学での学び方 に関する授業（熱心度）	相関係数	0.150 ***	0.353 **	0.283 ***	0.159 *	0.127	0.250 ***	0.199 **	0.296 ***	0.116	0.170 *	8
2 興味がわからない授業でもまじめに受け ていた	相関係数	0.101 *	0.168	0.194 **	0.169 **	0.217 *	0.083	0.105	0.266 ***	-0.105	0.200 **	6
3 なるべく良い成績をとるようにしていた	相関係数	0.180 ***	0.286 *	0.304 ***	0.286 ***	0.275 **	0.243 ***	0.193 **	0.230 ***	-0.125	0.282 ***	9
4 授業に関連して、わからないことや関心の あることが出てきたら自分で調べてみた	相関係数	0.340 ***	0.416 ***	0.367 ***	0.340 ***	0.469 ***	0.318 ***	0.413 ***	0.383 ***	0.070	0.345 ***	9
5 自分の学んでいる専門分野に興味があ りなかつた	相関係数	-0.218 ***	-0.228 +	-0.219 **	-0.236 ***	-0.271 *	-0.265 ***	-0.195 **	-0.279 ***	-0.286 *	-0.372 ***	9
6 内容が理解できない授業が多かつた	相関係数	-0.198 ***	-0.287 *	-0.249 ***	-0.246 ***	-0.214 *	-0.287 ***	-0.178 *	-0.264 ***	-0.066	-0.397 ***	9
7 複数の授業で学んだことを関連づけて 理解していた	相関係数	0.403 ***	0.342 **	0.370 ***	0.321 ***	0.390 ***	0.367 ***	0.378 ***	0.452 ***	0.333 **	0.403 ***	10
8 履修体系を考えて徐々に発展的な内 容の授業を履修するようにしていた	相関係数	0.344 ***	0.383 **	0.188 **	0.323 ***	0.276 **	0.342 ***	0.322 ***	0.291 ***	0.047	0.360 ***	9
9 授業で学んだことを授業外で活かした	相関係数	0.352 ***	0.457 ***	0.387 ***	0.362 ***	0.363 ***	0.347 ***	0.388 ***	0.380 ***	0.217 +	0.376 ***	9
10 授業外（アルバイト、サークル、インター ンシップなど）で学んだことを授業で活かした	相関係数	0.225 ***	0.368 **	0.273 ***	0.140 *	0.116	0.235 ***	0.345 ***	0.312 ***	0.293 *	0.237 **	9
11 授業では教えられたことをそのまま暗 記した	相関係数	-0.087 *	-0.128	-0.119	-0.153 *	-0.208 +	-0.187 **	-0.072 **	-0.068	-0.108	-0.202 **	4

注1：+：p<0.10、\*：p<0.05、\*\*：p<0.01、\*\*\*：p<0.001。  
注2：網掛け部分は各専門分野内における相関係数の最大値を指す。

表 9. 記述統計量

カテゴリー	変数	言語・文学 (各 N=567)				法学 (各 N=225)				
		平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値	
	専門分野別習得度	2.998	0.491	1.300	4.000	3.107	0.528	1.000	4.000	
基本的な変数	男性ダミー	0.249	0.433	0	1	0.533	0.500	0	1	
	父親の最終学歴 (大卒・大学院卒ダミー)	0.612	0.488	0	1	0.649	0.478	0	1	
	母親の最終学歴 (大卒・大学院卒ダミー)	0.307	0.462	0	1	0.329	0.471	0	1	
	実家の蔵書数	1.637	1.470	0	4.5	1.732	1.515	0	4.5	
	中学 3 年生のときの校内成績	4.199	1.055	1	5	4.436	0.967	1	5	
	高校 3 年生のときの校内成績	3.746	1.188	1	5	4.013	1.116	1	5	
	学部の偏差値	56.220	7.404	35.0	67.5	60.732	7.140	45.0	70.0	
	2020 年度調査ダミー	0.578	0.494	0	1	0.587	0.494	0	1	
	学習の量	(生活時間) 授業の予復習や課題 (卒論を含む) をやる時間	8.146	8.230	0	35	4.402	6.419	0	35
		(生活時間) 大学や内定先からの指示以外の自主的な勉強	2.985	5.600	0	35	5.384	9.025	0	35
(生活時間) 読書 (マンガ、雑誌を除く)		2.778	4.627	0	35	3.189	5.569	0	35	
学習の質①	(授業経験) 授業内容に興味がわくように工夫された授業	3.794	0.918	1	5	3.520	0.982	1	5	
	(授業経験) 将来に役立つ実践的な知識や技能が身につく授業	3.446	1.101	1	5	3.569	1.059	1	5	
	(授業経験) 授業内容の意義や必要性を説明してくれる授業	3.303	1.118	1	5	3.249	1.142	1	5	
学習の質②	(学習経験) 授業に関連して、わからないことや関心のあることが出てきたら自分で調べてみた	3.827	0.935	1	5	3.747	0.974	1	5	
	(学習経験) 複数の授業で学んだことを関連づけて理解していた	3.772	0.984	1	5	3.627	0.965	1	5	
	(学習経験) 授業で学んだことを授業外で活かした	3.427	1.186	1	5	3.080	1.226	1	5	
カテゴリー	変数	経済学 (各 N=220)				社会学 (各 N=256)				
	専門分野別習得度	2.832	0.562	1.000	4.000	2.859	0.426	1.100	4.000	
基本的な変数	男性ダミー	0.659	0.475	0	1	0.305	0.461	0	1	
	父親の最終学歴 (大卒・大学院卒ダミー)	0.450	0.499	0	1	0.691	0.463	0	1	
	母親の最終学歴 (大卒・大学院卒ダミー)	0.195	0.397	0	1	0.332	0.472	0	1	
	実家の蔵書数	1.137	1.326	0	4.5	1.686	1.469	0	4.5	
	中学 3 年生のときの校内成績	3.950	1.074	1	5	4.262	1.005	1	5	
	高校 3 年生のときの校内成績	3.555	1.268	1	5	3.844	1.184	1	5	
	学部の偏差値	54.650	6.664	35.0	70.0	57.287	7.883	35.0	67.5	
	2020 年度調査ダミー	0.677	0.469	0	1	0.477	0.500	0	1	
	学習の量	(生活時間) 授業の予復習や課題 (卒論を含む) をやる時間	5.839	7.901	0	35	10.252	9.914	0	35
		(生活時間) 大学や内定先からの指示以外の自主的な勉強	2.566	5.390	0	35	2.373	5.230	0	35
(生活時間) 読書 (マンガ、雑誌を除く)		2.523	5.021	0	35	2.797	5.131	0	35	
学習の質①	(授業経験) 授業内容に興味がわくように工夫された授業	3.405	0.944	1	5	3.535	0.961	1	5	
	(授業経験) 将来に役立つ実践的な知識や技能が身につく授業	3.341	1.037	1	5	3.160	1.045	1	5	
	(授業経験) 授業内容の意義や必要性を説明してくれる授業	3.209	1.043	1	5	3.109	1.111	1	5	
学習の質②	(学習経験) 授業に関連して、わからないことや関心のあることが出てきたら自分で調べてみた	3.609	0.947	1	5	3.656	1.021	1	5	
	(学習経験) 複数の授業で学んだことを関連づけて理解していた	3.645	0.966	1	5	3.695	0.958	1	5	
	(学習経験) 授業で学んだことを授業外で活かした	3.000	1.114	1	5	3.105	1.138	1	5	

表 10. 専門分野別習得度の規定要因 (重回帰分析)

カテゴリー	独立変数	言語・文学		法学		経済学		社会学		
		標準化偏回帰係数		標準化偏回帰係数		標準化偏回帰係数		標準化偏回帰係数		
基本的な変数	男性ダミー	-0.009		0.055		0.204	**	-0.018		
	父親の最終学歴 (大卒・大学院卒ダミー)	-0.002		0.080		-0.115	+	0.110	+	
	母親の最終学歴 (大卒・大学院卒ダミー)	-0.008		-0.058		0.116	+	-0.065		
	実家の蔵書数	0.019		0.013		0.092		0.091		
	中学 3 年生のときの校内成績	0.047		0.070		0.055		-0.093	+	
	高校 3 年生のときの校内成績	0.004		0.031		0.092		0.022		
	学部の偏差値	0.103	*	0.036		0.024		0.041		
	2020 年度調査ダミー	0.034		-0.007		0.151	*	0.085		
	学習の量	(生活時間) 授業の予復習や課題 (卒論を含む) をやる時間	-0.001		0.060		0.086		0.004	
		(生活時間) 大学や内定先からの指示以外の自主的な勉強	0.109	**	0.110	+	-0.053		-0.046	
(生活時間) 読書 (マンガ、雑誌を除く)		0.064		-0.015		-0.154	*	0.074		
学習の質①	(授業経験) 授業内容に興味がわくように工夫された授業	0.058		0.037		-0.064		0.006		
	(授業経験) 将来に役立つ実践的な知識や技能が身につく授業	0.020		0.048		0.039		0.097		
	(授業経験) 授業内容の意義や必要性を説明してくれる授業	0.005		0.105		0.042		0.039		
学習の質②	(学習経験) 授業に関連して、わからないことや関心のあることが出てきたら自分で調べてみた	0.140	**	0.156	*	0.130	+	0.181	**	
	(学習経験) 複数の授業で学んだことを関連づけて理解していた	0.234	***	0.092		0.193	**	0.286	***	
	(学習経験) 授業で学んだことを授業外で活かした	0.183	***	0.225	**	0.206	**	0.136	*	
自由度調整済み決定係数		0.257		0.197		0.260		0.289		
F 値		12.528	***	4.233	***	5.537	***	7.096	***	
N		567		225		220		256		

注: +:  $p < 0.10$ , \*:  $p < 0.05$ , \*\*:  $p < 0.01$ , \*\*\*:  $p < 0.001$ .

## 6. 結論

本稿では、全国の4年制大学の学部4年生に対するウェブ調査によって、人文・社会科学分野の専門分野別習得度と関連する大学教育は何かという問いを明らかにしてきた。本稿の主な知見は、10個の専門分野ごとにみても、大学教育の中でも授業経験よりも学習経験（特に探究的な学習、授業間を関連づけた理解、授業外での活用）の方が専門分野別習得度と有意な正の関連があったという点である。

以上から、本稿の結論は、人文・社会科学分野の専門分野別習得度と関連する大学教育は、授業経験（どういう授業をどれくらい受けたか）ではなく、学習経験（何を考え、どのように学んだか）ということになる。ただし、この具体的な内容については、専門分野間で共通する部分と共通しない部分があり、両者を慎重に見極める必要がある。本稿の知見に基づいて専門分野間の優劣を論じることは適切ではない。

それを踏まえて、本稿の知見の含意について考察する。

第1に、授業形態に過度に着目した大学教育改革・授業改善への警鐘が必要ではないかという点である。本稿の知見によれば、特定の形態・内容の授業を単独に展開しても、専門分野別習得度の向上とは結びつかない可能性がある。このことは、アクティブ・ラーニング型授業を表層的に理解して展開することの問題性を示唆しているように思われる。

第2に、大学に求められるのは、学生が自らの学習経験を高められるような仕組みづくりではないかという点である。本稿の知見は、授業、カリキュラム、授業外学習支援等を組み合わせた多面的学習支援の重要性を示唆しているように思われる。この点と関連して、DEWEY (1938=2004: 56-57) による「教育者の基本的な責任は、年少者たちが周囲の条件によって、彼らの現実の経験が形成されるという一般的な原理を知るだけでなく、さらにどのような環境が成長を導くような経験をするうえで役立つかについて、具体的に認識することである」という言葉が参考になるだろう。

最後に、今後の課題として、次の3点を指摘する。

第1に、専門分野間の相違点に着目した解釈と分析を進める必要があるという点である。今回は10個の専門分野を網羅的に概観した後に、4個の専門分野に絞って詳細な分析を行った。そのため、専門分野間の共通点の記述に重点を置きがちになった。今後は、多数の専門分野を調査対象にした強みを活かして、専門分野間の相違点とそれが生じる理由について検討する必要がある。

第2に、レポートライティング、卒業論文、ゼミに関する学習経験を独立変数に投入する余地があるとい

う点である。大学教育に特徴的なこれらの変数を投入した詳細な分析が必要である。本稿の分析は、大学教育の全体的な傾向を素描する速報的な位置づけとなる。

第3に、専門分野別習得度が就職活動を含めたその後のキャリア形成に関する変数とどのように関連しているのかという問いを明らかにする必要があるという点である。3章で述べたように、本稿のウェブ調査は学部4年生を卒業後まで追跡する設計となっている。そのため、今後、専門分野別習得度の職業的レリバンス（意義）に関する研究が控えている。

## 謝辞

ウェブ調査の実施・回答にご協力いただいた方々に厚くお礼申し上げます。本稿は、科学研究費補助金・基盤研究（A）の助成を受けた研究テーマである「大学教育の分野別内容・方法とその職業的アウトカムに関する実証研究」（研究代表者：本田由紀、研究課題／領域番号：18H03657）の研究成果の一部である。筆者は研究分担者としてこの研究に参加した。

## 注

- 1) この調査の概要については、京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾編（2018）で報告されている。
- 2) 調査対象学部の実員・入学定員・入学者数を分母とした場合の近似的な有効回収率は、第1波調査で7.4%、第1波追加調査で6.7%、両者の合計で6.9%である。①実員等の数値が入手できた年度は異なること、②実員が不明な学部については入手可能な年度の入学定員や入学者数を代用したことから、以上の数値は参考値である。
- 3) 独立変数間に強い相関関係はない。VIFの最大値は、1.539～2.170である。
- 4) 経済学においては、単相関係数でもても読書時間は専門分野別習得度と有意な負の関連がある。

## 参考文献

- 有本章編（2003）大学のカリキュラム改革. 玉川大学出版部, 東京
- DEWEY, J. (1938) *Experience and Education*, The Macmillan Company. 市村尚久訳（2004）経験と教育. 岩波書店, 東京
- 金子元久（2013）大学教育の再構築—学生を成長させる大学へ. 玉川大学出版部, 東京
- 関西大学教育開発支援センター（2021）2020年度 三者協働（学生・教員・職員）によるFD・SD研修の最終報告会記録. 関西大学高等教育研究 12: pp.189-202
- 葛城浩一（2006）在学生によるカリキュラム評価の可能



- 性と限界. 高等教育研究 9: pp.161-180  
京都大学高等教育研究開発推進センター, 河合塾編  
(2018) 高大接続の本質—「学校と社会をつなぐ調  
査」から見えてきた課題. 学事出版, 東京  
溝上慎一 (2018) 大学生白書 2018—いまの大学教育では  
学生を変えられない. 東信堂, 東京  
両角亜希子 (2010) 大学生の学習行動の大学間比較—授  
業の効果に着目して. 東京大学大学院教育学研究科  
紀要 49: pp.191-206  
村澤昌崇 (2003) 学生の力量形成における大学教育の効  
果. 有本章編. 大学のカリキュラム改革. 玉川大学出  
版部, 東京: pp.60-74  
日本学術会議 (2010) 大学教育の分野別質保証の在り方  
について. 日本学術会議. [https://www.scj.go.jp/ja/  
info/kohyo/pdf/kohyo-21-k100-1.pdf](https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-k100-1.pdf) ( 参 照 2022.  
03.08)  
小方直幸 (2008) 学生のエンゲージメントと大学教育の  
アウトカム. 高等教育研究 11: pp.45-64

be paid to similarities and differences among disciplines. The findings suggest that education reform and class improvement which focus on class styles excessively could not be effective and that university should create the system in which students improve learning experiences.

**KEYWORDS:** Learning level of disciplines, Reference standards in the field of disciplines made by the Science Council of Japan, Learning experiences, Class experiences

---

2021年12月22日受理

1 Center for General Education, Kyoto Sangyo University

---

## What University Education is Relevant to the Learning Level of Disciplines in Humanities and Social Sciences? : Focusing on the Reference Standards in the Field of Disciplines Made by the Science Council of Japan

---

Osamu KOYAMA<sup>1</sup>

The purpose of this paper is to examine what university education is relevant to the learning level of disciplines in humanities and social sciences which is based on the reference standards in the field of disciplines made by the Science Council of Japan. The data were collected by conducting an online survey of fourth-year university students in humanities and social sciences. The main findings are as follows. Among ten disciplines, learning experiences had more positive effects on the learning level of disciplines than class experiences: inquiry learning, understanding among classes, utilization outside of classes. In conclusion, university education which is relevant to the learning level of disciplines is learning experiences: what university students think of and how they learn. However, attention should